
紅魔館の小さな物語

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅魔館の小さな物語

【Nコード】

N1204N

【作者名】

刹那

【あらすじ】

いつもどおり、紅魔館へ来た魔理沙。その後もいつもどおりの筈だったのに、何気ない一言で咲夜を傷つけてしまった

魔理沙と咲夜を中心とした、紅魔館のほのぼのプチストーリーです！

(前書き)

この作品は、東方projectの二次創作です。

そして、私的解釈多め(特に中盤あたり)な上、原作とは大分異なると思います。

それでもおkと言う方はどうぞ！

「恋符『マスタースパーク』!!!」

とある昼下がりに、真つ赤な館紅魔館門前にて。

黒白の魔法使い霧雨魔理沙は例外なく、門番に十八番のマスタースパークをぶつ放していた。

「ふうっ、んじゃ通らせてもらっせ〜」

「うう…また咲夜さんに怒られる…」

涙目で魔理沙を見送る、門番してる妖怪のほんみり…紅美鈴。

いつもの事だが、やっぱり彼女は妖怪らしくないと思う。

これならどっかの人間メイドのほうがよっぽど妖怪らしい。

「あら、何か失礼な事を考えてない？黒白の泥棒鼠さん？」

すっ、と音もなく妖怪らしい人間メイド、十六夜咲夜が現れる。

これは彼女の十八番の、時間操作でいきなり現れただけである。

「別に何も。しかし、いつもながらお早いこった。もっとゆっくりしたらどうだ？老けるぞ」

最後の老けるぞ、にびくんと反応する咲夜。

ちなみに、今の言葉は『時間を止めてばかりいると老けるから、大

人しく指をくわえて待つてる』と言つ意味になる。

「…そう、じゃあ泥棒鼠を駆除したらゆっくりするわ」

「いつてらっしゃい」

「あんたの事よ」

呆れた、と言わんばかりに肩を竦める咲夜。

「私は泥棒じゃないぜ。無断で死ぬまで借りてくだけだ」

「それを泥棒と言つのよ」

「それなら窃盗だぜ。私は違うけどな」

「違わない。2つの意味でね」

にしし、と笑う魔理沙。

咲夜は心底呆れているようだ。

ちなみに、彼女の言った2つの意味の違わないは、泥棒と窃盗の差、そして魔理沙の違うぜに対して言っている。

「それよりさ、そこをどいてくれないか？」

「却下」

即答する咲夜。

「いいじゃないか。私はお前さんを構っている程暇じゃないんだ」

「私も暇じゃないわ。でも、侵入者及び泥棒を排除するのが私の仕事だから。死んでも恨まないでよね？」

咲夜はそう言うと、どこからかナイフとスペルカードを取り出す。

咲夜お得意の種なし手品だ。

「それは私の台詞だな。まあ、咲夜がその気なら仕方ないな。お前さんこそ、死んでも恨むなよ？」

魔理沙も、スペルカード、そしてミニ八卦路を手に持つ。

「いくら化け物じみたお前さんでも、この魔理沙様の敵ではないぜ」

戦う前に、皮肉を込めて言う。

「……………」

「おっと、不意打ちなんて卑怯だぞ？」

ナイフが1本、魔理沙の心臓を狙って飛んできた。

魔理沙は、それを難なくかわす。

しかし、正直驚いた。

咲夜なら、『あんたこそ私の敵ではないわ』ぐらい言うと思ったのに、私を睨みながら黙ってナイフを投げつけてくるだけだった。しかも、若干表情が暗い。

私はそんなに落ち込むような事を言ったか？

「…幻葬『夜霧の幻影殺人鬼』」

魔理沙が疑問に思っていると、咲夜がスペルを発動した。大量のナイフが、魔理沙に刃を向ける。

「おうおう、今日は初っ端から飛ばすな。どうした？お前らしくない」

「…らしくない？それは、あなたが勝手に決めた事でしょう？本当の私は、ただの殺人鬼よ…」

咲夜はぽつりと呟く。そして、ナイフは魔理沙へと飛んでゆく。

「おっと、流石にこの量は魔理沙さん疲れるぜ。って訳で…恋符『マスタースパーク』！！」

本日2度目のマスタースパークを放つ。

マスタースパークは、咲夜のナイフを全て飲み込み、そして咲夜自身も飲み込んだ。

いつもは、これで咲夜が被弾してはい終わりだったが、今日は少し違った。

「いつもながら荒技ね。修理が大変だわ」

咲夜は、そこに立っていた。

それも、無傷で。

「嘘…だろ？私のマスパくらって無傷って、おま…化け物かよ？」

魔理沙は唾然とする。

ぶっちゃけ、マスタースパークにはかなりの自信があった。
マスタースパークは、家なんか楽にぶっ飛ばせる。

現に1度霊夢の神社をぶっ飛ばして霊夢にぶっ飛ばされた。
フランの分身だって、あれを食らえば消える。

本来人間が食らえば、生きてるだけで凄いの。

「化け物…か」

「へ？」

急に、咲夜が呟いた。

そして、魔理沙に悲しそうな目で質問をした。

「ねえ魔理沙。私ってさ、化け物みたいに強い？」

なんだ、いきなり。

魔理沙が首を傾げていると、咲夜は次々と質問を重ねる。

「私の能力って変？」

私の力はおかしい？

私の存在意義って何？

私を必要としてくれる人なんているの？

私は本当に人間？

私は…」

「お、おい、ちょっと待てよ。そんなに一気に質問されちゃあ、答

えられないぜ？」

とりあえず、咲夜を一旦黙らせる。

「なあ咲夜。最初から、分かりやすく説明してくれないか？」

子供に問いかける様に、精一杯優しい声で話す。

「魔理沙、私の事化け物じみたって言ったよね？」

「え？あ、ああ……」

「私ね、時々不安になるの。本当に自分が人間なのかって」

咲夜は、瞳に涙を溜めながら言う。

「……まあ、咲夜は人間なんだろう？」

「うん、多分……でも、やっぱり不安なの。本当は、妖怪なんじゃないかって」

確かに、咲夜は妖怪よりも妖怪らしい。

というか、里の人間や妖怪達からは、鬼だとか悪魔だとか妖怪だとか言われてる。

「ん……まあ、なんでもいいんじゃないか？ほら、種族なんて関係ないだろ？」

「よくない……よくないよう……」

ぼろぼろと涙を零す咲夜。

さて、困ったな。

どうするか…？

「あー、そのー、お前はなんでそんなに種族にこだわるんだ？ぶっちゃけ、ここには魔女も吸血鬼もいるんだから関係ないだろ？」

「私、小さい時外の世界にいたの」

「は？」

いきなり、咲夜が語りだした。

「私ね、物心ついた時から能力を持ってたし、周りの人もそれをしてたの。」

だから、私は嫌われた。でも、それは別に良かった」

少し、胸が痛くなった。

自分も、魔法使いを目指していたせいで咲夜みたいに周りから嫌われていたから…

「一番つらかったのは、みんなが私を化け物って言う事だった。」

私は、化け物じゃないのに、誰も信じてくれなくて、ただ石を投げつけられて…

私は人間なのに。人間の筈なのに。でも、誰も信じてくれなかったのが凄くつらかった…」

その言葉に、凄く胸が痛くなった。

咲夜は、化け物扱いをされるのを嫌っている。
自分だって、化け物扱いされていい気分にはならない。
なのに、私は咲夜に化け物か？と言った。
それが、どれほどつらかったのか…

「ごめん…」

そう、謝る事しか出来なかった。

「ううん、私こそ、変な話してごめんなさい。
ねえ、魔理沙、もう1度だけ聞いていい？

…私は、本当に人間なの？」

じっ…と、咲夜が魔理沙の目を見つめる。
青くて、悲しそうな目が。

「…さあな。絶対な答えは私には分からんよ」

魔理沙がそう言うと、咲夜は心底悲しそうに顔を伏せた。

「そう…」

「でもな」

「？」

咲夜が顔を上げる。

「絶対ではないが、人間だと思うぜ？」

咲夜自身が自分を人間だと思うなら、人間なんじゃないか？」

「で、でも…人間みたいじゃないわ…」

やっぱり、泣きそうな顔になる咲夜。
だから…

「人間みたいじゃなくても、人間は人間だ。それは変わらないだろ？絶対じゃない。絶対人間、なんて確信はないさ。でも、少なくとも私は咲夜を人間だと信じてる。それで十分だろ？」

「魔理沙…」

安心できるように、しっかりと言葉を口にし、ぎゅっと咲夜を抱きしめた。

「仮に、お前が人間じゃなかったとしても、お前が望むなら私は咲夜を人間だと信じる。」

そして、友達なのは変わらない。これだけは絶対だ」

「ひぐつ、魔理沙あ…」

ぎゅっ、と咲夜も魔理沙に抱きつく。

「ほら、もう泣くなつて。私の咲夜らしくないぜ？お前は、偉そうに上から目線で話して、時々照れたり笑ったり、意外な一面を見せる程度がちょうどいいんだ。私的には」

「ばか…」

魔理沙から離れ、涙を拭う咲夜。

「確かに、こんなうじうじしてるのは私らしくないわね。…ありがとう、魔理沙」

にこっと可愛らしく笑う咲夜。

「どういたしましてだぜ」

魔理沙も、にかつと明るく笑う。

「そうだ、そう言えば侵入者の排除の途中だったわ」

「うお？」

突然、すくつと立ち上がる咲夜。

そして、スペルカードを手に持ち、高らかに宣言した。

「奇術『エターナルミーク』！」

「はあ！？ちょ、まつ…っあー！？」

ピチューン！！

いきなりのスペル宣言で、もろに被弾する魔理沙。

「よしっ！」

「よしじゃねえよ！」

「えー…」

「えーも駄目！」

「じゃあ何ならいいのよ」

「何も駄目だぜ」

「……………」

「うん、言いたい事は分かったぜ」

いつもの調子に戻る。

いや、まあ咲夜がなんか子供っぽいけど。

「ああそつだ、今度からはちゃんと門番に私を呼んでもらってね」

いきなり、咲夜がそう言う。

「なんでだ？はっ、まさか、館の中にすら入れないってか！？」

「違うわよ。ちゃんと入ってくるなら、客人として紅茶とお菓子くらいは出してあげるってことよ」

少し顔を赤らめながら言う咲夜。

こ、これはっ！

「咲夜がデレたぜ！」

「なっ！？で、デレてないわよ！」

さらに顔を赤らめる咲夜。
なんかもう、耳まで赤い。

「ツンデレ咲夜が…ついにデレたぜ…これは奇跡だ！」

「ツンデレじゃないわよ！てか、あんたなんかの為にデレないわ！」

「おお、アリスといい勝負のツンデレじゃないか！」

「ちがーう！！！」

その日、しばらく紅魔館に魔理沙と咲夜の楽しそうな声が響いていた

場所は変わって、図書館

「あーらら。魔理沙取られちゃったわね。パチエ」

「あら、そう言うあなたこそ、魔理沙に咲夜取られちゃったじゃない。レミィ」

紅魔館の主であるレミア・スカーレットとその親友であり図書館の管理者、パチュリー・ノーレッジが話をしていた。

「…あの2人、これからどんどん仲良くなるでしょうね。運命が見えるわ」

「…そう」

「私とパチエ、下手をすればそれ以上になるわ」

「…そう」

ただ、相槌を打つだけのパチュリー。

「パチエ、なんか言いたい事ないの？」

「…レミイはどうなのよ」

「え？私？」

レミリアは少し驚く。

「…私は、咲夜が幸せなら、それでいいかな…」

今まで、完全に仕事一筋だった咲夜がそういう事に興味を持ってくれて、凄く嬉しいから…」

少し、寂しそうに笑うレミリア。

パチュリーも、少し寂しそうに笑う。

「そうね。確かに、2人が幸せならいいか…」

まあ、紅魔館には来るわけだし」

図書館には、レミリアとパチュリーの、楽しそうだけど少し寂しそうな笑い声が木霊した。

次の日

「やつほー！さーつきゅん！来てやったぜー」

「ちよっ！？さつきゅんって言うな！」

魔理沙が叫ぶと、咲夜がやって来た。

そして、図書館へと向かう。

「まあまあ、んで？紅茶くれんだろー？」

「はいはい、全く……」

「咲夜あー！私にもー！」

ばんばんと本を叩きながら言うレミリア。

「レミイ、本は丁寧に。あ、咲夜、私も貰える？」

「はい、かしこまりました」

咲夜がぺこりと頭を下げる。

「むうー…咲夜！」

すると、レミリアが不機嫌に咲夜を呼んだ。

「はい、なんですか？お嬢様」

「私は咲夜をさつきゅんって呼ぶから、あなたは私をレミイと呼び

なさい！敬語も禁止！」

「ふえ！？む、無理ですよ！」

ぶんぶんと手をふる咲夜。

「だーめ！これは命令よ！さっきゅん！」

「はうう…え、えーと…レミィ…」

「うんうん、いいじゃない！」

恥ずかしそうに言う咲夜と、満足そうなレミリア。

それをみた魔理沙とパチユリーも、咲夜に自分をあだ名で呼ぶように言った。

「えっと、魔理沙…じゃなくて、まりゅは兎も角、レミィ様とパチエ様は流石に敬語を使わせていただきます」

苦笑いしながら言う咲夜。

正直、ついまりゅと呼べと言ったのは失敗だった。
くそハズい。

っーか言いにくい。

ちなみに、私は咲夜をさきゅと呼ぶ事になった。
自分のネーミングセンスを疑うぜ。

「まあ、これでみんな親友だな！」

魔理沙がそう言うと、みんなが嬉しそうに笑う。
パチュリーは顔を真っ赤にしながら「まりゆ…まりゆ…いいわあ…」
と呟いてる。

「兎に角！これからもよろしくな」

「ええ、よろしく」

ぎゅつと魔理沙の手を握る咲夜。

その顔は、普段の彼女からは想像がつかないぐらい嬉しそうな笑顔
だった。

幻想郷は、今日も平和なだった

(後書き)

はい、後書きです！

今回の作品は、今までフラ咲の出会い、レミ咲の別れと来たので、
めーさくの現在(？)を書こうと思って書きました。

はい、後書きを読んだ方は、「めーさくじゃないじゃんww」とな
ったと思います。

これは、何故か魔理沙になってしまったと言うオチです。それだけ
です。

美鈴、ごめんなさい…

出番少ないし…

まあ兎に角、今回はまりさくの現在(？)です！

もしよろしければ、見てない方は小さな咲夜とフランドールと時を
刻まない時計を読んでいただければなーとか思っています。(バシン

っ！ ハリセン

誤字、脱字、感想等がありましたら教えて下さい。

読んで下さった方々、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1204n/>

紅魔館の小さな物語

2010年10月10日21時02分発行